

東京・丸の内に新たなアートスポットが誕生！
10 月 1 日(土)、静嘉堂文庫美術館開館
開館記念展 I 「響きあう名宝—曜変・琳派のかがやき—」

明治 25 年(1892)、岩崎彌之助(1851~1908 岩崎彌太郎の弟、三菱第二代社長)によって創設され、息子の岩崎小彌太(1879~1945 三菱第四代社長)によって拡充された父子二代によるコレクションをもつ公益財団法人静嘉堂は、和漢の古典籍約 20 万冊と、東洋の古美術品約 6500 件を所蔵し、そのうちに国宝 7 件、重要文化財 84 件を含みます。

本年 10 月 1 日(土)、静嘉堂文庫美術館(東京都世田谷区、河野元昭館長)は、展示ギャラリーを東京・丸の内の「明治生命館」(昭和9年<1934>竣工。東京都千代田区)の 1 階に移転、「静嘉堂@丸の内」の新たな愛称とともに、オープンいたします。

東京駅の皇居側に位置するエリア「丸の内」は、かつて岩崎彌之助が、その一角にミュージアムを造りたいと願った場所でした。当時実現には至りませんでしたが、明治 25 年(1892)という早い時点で、彼はすでに丸の内に美術品を公開する美術館構想を持っていました。

岩崎彌之助は、三菱第二代社長となって事業の転換、多角化をはかり、今日の三菱グループの礎を築いた人物です。日本の伝統的文化・美術を保護し、同時代の芸術作家たちを積極的に支援するとともに、絵画・彫刻・書跡・工芸までを幅広く購入していきました。当時、国内の美術品が海外へ売却されていくのを憂い、“東洋のものは東洋へ”留めんとする意思からの蒐集でした。

その嗣子、岩崎小彌太の時代では、西欧で得た見識をもって、各ジャンルにおける斯界の第一人者を招き、学術的な助言を得て美術コレクションの充実をはかり、中国陶磁を系統的に集めている点が特色です。20 世紀初頭以降、大陸では清朝宮廷コレクションが海外へ流出し、各地の遺跡から唐三彩、そして宋代諸窯のやきものが発見される時代にあって、それまでに知られなかった新たな作品が購入されました。また小彌太は表千家久田流の宗匠について“茶の湯”の稽古にも熱心に取り組み、理解を深めました。

昭和 9 年(1934)には、陶芸の至宝で茶道具の白眉とも称される、国宝《曜変天目(稲葉天目)》が小彌太の所有となりました。

父子二代によって形成された静嘉堂のコレクションは、質量ともに国内屈指のものです。これらの文化財を一人でも多くの方々に、より身近に楽しんでいただくため、静嘉堂文庫美術館は「静嘉堂@丸の内」として新たなスタートを切ります。



広報画像 1
静嘉堂文庫美術館 展示ギャラリー(ホワイエ)完成予想図
資料提供:竹中工務店

静嘉堂創設 130 周年・新美術館開館記念展 I 「響きあう名宝—曜変・琳派のかがやき—」

開催期間：2022 年 10 月 1 日(土)～12 月 18 日(日)

[前期]10 月 1 日(土)～11 月 6 日(日) [後期]11 月 10 日(木)～12 月 18 日(日)

※本資料中の図版マーク：●は前期、▲は後期、無印は全期間中の展示です。

開催場所：静嘉堂@丸の内 〒100-0005 東京都千代田区丸の内 2-1-1 明治生命館 1 階

開館時間：10:00～17:00

※金曜は 18:00 閉館。入館は閉館時間の 30 分前まで

休館日：月曜(10 月 10 日は開館)、10 月 11 日(火)、
11 月 8 日(火)、11 月 9 日(水)

主催：静嘉堂文庫美術館

ホームページ：<https://www.seikado.or.jp/>

twitter：@seikadomuseum

お問い合わせ：電話 050-5541-8600(ハローダイヤル)

入館料：一般 1,500 円 大学・高校生 1,000 円 中学生以下無料



広報画像 2
重要文化財 明治生命館
昭和 9 年(1934)竣工

【本展覧会の3つの見どころ】

見どころ1「重文」の中に「国宝」7つ!?

新たな静嘉堂のギャラリーは、平成 9 年(1997)に昭和の建造物として初の重要文化財に指定された「明治生命館」の 1 階です。当時の西洋近代建築の最高傑作ともいわれる意匠設計は、東京美術学校(現 東京藝術大学)教授の岡田信一郎(1883～1932)と弟の岡田捷五郎(1894～1976)によるものです。

この古典主義様式の名建築の中に、国宝《曜変天目(稲葉天目)》など、静嘉堂の「国宝」7つを大公開!!

見どころ2「付藻」^{つくも}「松本」^{おめいぶつ}、大名物の茶入、400 年の謎を解く!

静嘉堂所蔵の茶道具からは、彌之助コレクションのハイライトをご覧ください! その収集の嚆矢とされ、“三英傑”(信長・秀吉・家康)に伝来した唐物茄子茶入の《付藻茄子》と《松本(紹鷗)茄子》が登場。それぞれのドラマチックな来歴、そしてこの2つの茶入が大坂夏の陣(1615 年)で大破し、破片から現在の姿によみがえった修理の技、約 400 年前の漆繕いの超絶技巧を、最新の X 線 CT 画像からひもときます!

見どころ3 響きあう「琳派」と「中国美術」!

静嘉堂の日本美術を代表して、オープニングでは「琳派」の名品が一堂に!

「琳派」前期は金にかがやく俵屋宗達筆の国宝《源氏物語関屋濡標図屏風》を、後期には銀にかがやく名品、酒井抱一筆の《波図屏風》とともに所蔵の琳派の名品を揃え、皆様をお迎えします。

その琳派と相対するは、静嘉堂が豊かに所蔵する“中国文化の粋”たる絵画と工芸品、そして古典籍!

前期には、気品漂う、崇高な宋～元時代の、後期には明るく清らかな明～清時代の絵画と工芸品を公開。

琳派と中国美術の粋が集う、贅沢な空間をお楽しみください!

【展覧会概要と各章のご紹介】

開館記念展Ⅰ「響きあう名宝一曜変・琳派のかがやき」では、岩崎家父子蒐集コレクションを4つの章(Galley 1~4)で展示します。

国宝《曜変天目(稲葉天目)》、国宝・俵屋宗達筆《源氏物語関屋滞標図屏風》をはじめ、所蔵する7件の国宝すべてを、前・後期に分けて公開します。

新展示室は、昭和の建築で初めて重要文化財の指定を受けた明治生命館の1階に、当初の建築部分を生かしてつくられています。室内全体が壮麗な大理石造りで、高い天井からはガラス越しに自然光が差し込んでおり、日々で異なる表情を見せる空間となります。4つの展示室は、中央部の広い「ホワイエ」をとり囲むように設けられ、それぞれの展示室に飾られた名宝たちが、互いの美を響かせ、共鳴させているかのように感じられることでしょう。今から約130年前、岩崎彌之助が東京丸の内に造りたいと願った美術館－創設者の想いを受け継ぎ、歴史あるこの近代洋風建築の中に開館いたします。



広報画像 3
国宝《曜変天目(稲葉天目)》
建窯 南宋時代(12-13世紀)



●広報画像 4
国宝 俵屋宗達筆 《源氏物語関屋滞標図屏風》 江戸時代・寛永8年(1631)

第1章 静嘉堂コレクションの嚆矢ー岩崎彌之助の名宝蒐集

明治17年(1884)、岩崎彌之助が購入した最初の茶道具といわれる大名物の唐物茄子茶入、《付藻茄子》と《松本(紹鷗)茄子》。両作品とも名だたる茶人たちの茶会で使用され、戦国の“三英傑”、信長・秀吉・家康の手中にあった、著名な茶入です。ことに《付藻茄子》は、一国一城に値するほど尊ばれたものです。

これら2つは大坂夏の陣(1615年)で大破し、大坂城の焼け跡から他の名物茶入とともに破片が探し出され、それが塗師の名工、藤重藤元・藤巖父子によって漆繕いされて今日の姿があります。それを手にした徳川家康は見事な繕いを絶賛。《付藻茄子》と《松本(紹鷗)茄子》は藤重父子にそれぞれ下賜されて一箱に納められ、明治初期まで藤重家に伝えられました。

三菱の前身の社名「九十九商会」と同じ「付藻(九十九)」の名をもつ茶入と巡り合えた千載一遇のチャンス

を、若き彌之助は逃しませんでした。

兄・彌太郎に借金をしてまで入手したとされています。



広報画像 5
(右)大名物《唐物茄子茶入 付藻茄子》
(左)大名物《唐物茄子茶入 松本(紹鷗)茄子》
いずれも、南宋～元時代(13-14世紀)

★トピック 今年1月、《付藻茄子》と《松本茄子》のX線CTスキャン撮影を東京国立博物館の施設で行いました。360度、漆継ぎの様子がはっきりと判明！藤重父子の思いを込めた約400年前の“超絶技巧”の修繕のさまを、最新のCT画像から紐解きます。



明治 21 年(1888)、彌之助は大阪の両替商に担保として預けられていた仙台藩伊達家の什宝 10 件をまとめて購入します。そのなかには千利休(1522～1591)所持と伝わる茶道具、《青磁鯨耳瓶(砧花入)》や重要美術品の《唐物茄子茶入 利休物相》、そのほか重要文化財《虚堂智愚墨跡「景西至節偈」》などがありました。おりしも本年は、千利休の生誕 500 年です。利休ゆかりの茶道具の名品もあわせ、公開いたします。また、彌之助が蒐集した名品には、金・銀を繊細に用いて和・漢の優れた詩歌を、中国の美しい料紙に書した、書跡の国宝、《倭漢朗詠抄 太田切》があります。平安時代の名品も、ともにご堪能下さい。

そして、彌之助が最も早く蒐集をはじめたとされるのが「刀剣」です。



土佐藩出身の彼の刀剣コレクション形成には、同郷で刀剣の目利きでもあった今村長賀(宮内省御剣掛)らの存在も大きかったとされます。

現在、小彌太の蒐集にかかる作品も合わせ、静嘉堂には約 120 振の刀剣(うち国宝 1 振、重文 8 振)が所蔵され、国内有数の充実を誇ります。

第 1 章では、彌之助蒐集の備前刀 2 振を精選し公開いたします。



(左上)広報画像 6

《青磁鯨耳瓶(砧花入)》

龍泉窯 南宋時代(13 世紀)

(左中段)広報画像 7

重要美術品《唐物茄子茶入 利休物相(木葉猿茄子)》

南宋～元時代(13-14 世紀)

(左下段)広報画像 8

国宝《倭漢朗詠抄 太田切》 平安時代(11 世紀)

第 2 章 中国文化の粋

静嘉堂のコレクションのうち、中国美術の占める割合は大きく、コレクションの根幹となっています。彌之助は明治5年(1872)に米国に留学、小彌太は明治後期に英国に留学していますが、彌之助は幼少より土佐の藩校にて、大阪で重野成斎の私塾で漢学を学びました。小彌太も中国陶磁や茶道への造詣を深めながら、当時の静嘉堂文庫長・諸橋轍次博士から中国の古典を学び続けました。

東洋の美術をこよなく愛した父子の中国美術コレクションはまさしく 昔から評価の高い“正統的”な作品群です。本展では、前期に宋～元、後期に明～清時代の書画・工芸品を展示します。

宋、元時代の絵画では、南宋時代を代表する画院画家・馬遠筆の伝承を持つ国宝《風雨山水図》をはじめ、画僧・牧谿の重要文化財《羅漢図》、謎の多い因陀羅と楚石梵琦のコラボレーション、国宝《禅機図断簡 智常禅师図》、また宋・元時代の陶磁器と漆芸の逸品、静嘉堂ならではの、宋版の貴重書も出品いたします。



●(上)広報画像 9

国宝 伝 馬遠《風雨山水図》

南宋時代(13 世紀)

●(下)広報画像 10

国宝 因陀羅・楚石梵琦/題《禅機図断簡 智常禅师図》

元時代(14 世紀)



後期は、煎茶人のあこがれ、明時代の張瑞図^{ちやうずい と}、来日して日本画壇に大きな影響を与えた沈南蘋^{しんなんびん}の画幅、大名家に伝来した余崧^{よ すぐ}筆《百花図巻》など、江戸時代以来、日本で高く評価されてきた名品を精選して公開します。景德鎮官窯の精巧な陶磁器や、漆芸品、煎茶道具など、日本の人々が憧れ続けた中国美術の粋を、十分堪能して頂ける一室となることでしょう。



▲(左)広報画像 11
余崧《百花図巻》
清時代・乾隆 60 年(1795)

▲(右)広報画像 12
《牡丹堆朱稜花盆》
明時代・永楽年間(1403-24)

第 3 章 金銀かがやく琳派の美

新美術館の Gallery3 は最も広い展示室です。ここでは、静嘉堂所蔵の光悦、宗達に始まり、光琳、乾山、抱一、其一、抱二までの優品によって、華やかな琳派の流れをご紹介します。

俵屋宗達の国宝《源氏物語関屋濡標図屏風》(画像4、前期) や、尾形光琳^{おがたこうりん}の重要文化財《住之江蒔絵硯箱》、渋く輝く銀地の画面に迫力ある筆致で波濤を描いた、酒井抱一^{さかいほういつ}の《波図屏風》(後期)、全 72 図からなる画帖《絵手鑑》^{え て かがみ}、鈴木其一^{きいつ}の《雪月花三美人図》(後期)、そして、工芸品では光琳の弟・尾形乾山の作品、抱一の下絵をしばしば用いて蒔絵を手がけた原羊遊斎^{はらようゆうさい}の印籠^{なづめ}や棗の名作も公開いたします。



- ▲(上段左)広報画像 13 酒井抱一《波図屏風》江戸時代・文化 12 年(1815)頃
- ▲(上段右)広報画像 14 鈴木其一《雪月花三美人図》三幅対のうち「月と萩」(高尾大夫)江戸時代(19 世紀)
- ▲(下段左)広報画像 15 重要文化財 尾形光琳《住之江蒔絵硯箱》江戸時代(18 世紀)
- (下段中)広報画像 16 酒井抱一《絵手鑑》(全 72 図)のうち「紅葉と鈴虫」、「黒樂茶碗」江戸時代(19 世紀)
- (下段右)広報画像 17 左:原羊遊斎《八重菊蒔絵大棗》江戸時代・文化 14 年(1817)
右:原羊遊斎《片輪車螺鈿蒔絵大棗》江戸時代・文政 12 年(1829)

第 4 章 国宝「曜変天目」を伝えゆく一岩崎小彌太の審美眼

岩崎彌之助の長男・小彌太^{きよとろ}は、自身の俳号を「巨陶」としたほどの陶磁器の愛好者で、特に中国陶磁においては、当時筆頭の大コレクターとして知られます。小彌太の陶磁器蒐集は、茶道具における評価など既存の価値観にとらわれない、その作品を“鑑賞”したときの美しさや歴史的な位置付けに重きをおく、西洋的な

視点で購入していったところに、先進的な見識がありました。

小彌太の中国陶磁コレクションの中で質量ともに優れた作品群には、重要美術品《三彩鴨形容器》(画像 18)など、唐時代の貴族墓から発見された副葬品の唐三彩、宋代名窯の青磁や白磁、またわが国で「呉州赤絵」と称される明末民窯で焼成された五彩大皿(画像 19)、《青花八宝唐草文壺》といった景德鎮窯の精巧な清朝陶磁などがあげられます。

そして、小彌太の購入品で、静嘉堂コレクションでもっとも著名な作品、国宝《曜変天目(稲葉天目)》(画像 3)も、この Gallery4 において、新たな展示ケースと照明でのお披露目です。本碗は、昭和 9 年(1934)、淀藩主稲葉家当主からの譲り状が添う形で岩崎家に継承(購入)されました。夜空に満天の星を見るかのような神秘的な輝きが現れた曜変天目は、世界で完品がわずか3碗、それがいずれも日本にあり、すべてが国宝に指定されています。その焼成方法はいまだミステリアスなままです。別称「稲葉天目」とも呼ばれる静嘉堂の曜変天目は、青く美しい光彩が、最も華やかな陶磁器の至宝です。



▲(左)広報画像 18
重要美術品 《三彩鴨形容器》
唐時代(7-8 世紀)

▲(中)広報画像 19
《五彩牡丹鳳凰文盤》
明時代(17 世紀)

【その他、見どころとなる国宝】

国宝 趙孟頫《与中峰明本尺牘》

趙孟頫は元時代を代表する文人。本作は、彼が天目山などに住した高僧・中峰明本に宛てた 6 通の尺牘(手紙)が「帖」に仕立てられたものです。

日本にある趙孟頫の作品の中で最も優れた作と評価され、世界的に知られる名品です。鎌倉時代の日本の留学僧たちが憧れ、我が国とも縁の深い中峰明本と取り交わされた書の名宝を、どうぞご鑑賞ください。



広報画像 20
国宝 趙孟頫《与中峰明本尺牘》
元時代(14 世紀)

国宝 手搔包永《太刀 銘 包永》

小彌太は、昭和 8 年(1933)頃から、父彌之助が熱心に蒐集した備前物を中心とする刀剣コレクションの拡充を志し、相州・大和・奥州物の優品を新たに加えました。この太刀は、質実剛健な大和物の特色を存分に示しつつ、制作当初に近い健全な状態が保たれた名刀です。



広報画像 21
国宝 手搔包永《太刀 銘 包永》
鎌倉時代(13 世紀)

【報道に関するお問い合わせは】

◆静嘉堂文庫美術館 広報事務局(共同 PR 内 担当:三井)

※在宅勤務も増えているため、メールでいただくと助かります。

E-mail:seikado-pr@kyodo-pr.co.jp / TEL. 03-6264-2382

〒104-0045 東京都中央区築地 1-13-1 銀座松竹スクエア 10F

◆静嘉堂文庫美術館 TEL. 080-1708-7717(広報担当:大森)